

Study Kagoshima Short Stay Program 2012(平成24年度)プログラム実施報告書

大嶋 眞紀
(プログラムコーディネーター)

1 プログラム概要の決定

平成24年度も、23年度に引き続き、JASSOによるショートステイ事業を行うことを留学生センターで決定した。企画の名称は前年に続き、「Study Kagoshima Short Stay Program」とし、受講対象者を海外の協定校2校から募ることとした。具体的には、中国及び、その他のアジア諸国の枠からインドの2大学を申請し、日本語の未習者を募ることとした。奨学金が8万円付与されること、期間は2月の後半12日間とすること、などを留学生センター連絡会議で確認した。以下に企画、実施、評価、改善と展望についてまとめる。

A. 日本語レベルの設定とプログラム内容の検討

日本語のレベルについては前年同様、日本語未習得者に限定することとした。これは既習者の場合、様々なレベルの応募者が予想され、統一的なクラスの開講が困難となることが予想されたためである。平成24年度10月より、コーディネーターを中心に、プログラムの具体的な内容を確定した。日本語入門クラスを15コマ開講し、修了者には1単位を与えることや、鹿児島についての英語による講義を5コマ設けること、フィールドトリップを2回行い、またオリエンテーションや修了時の行事などの確定を行った。また留学生2人につき1名の日本人学生チューターを配し、日常生活で事務職員とともにサポートする体制を構築した。2月のプログラム実施に備え、日本語教材の作成、受講生のスタディ・レポート、プログラム評価などのフォーマットも確定していった。さらに関係教職員の連携体制を整えた。

B. 広報・募集・受付状況

広報は、10月から開始した。募集予定地域に居住するキーパーソンを通じて、協定校にアナウンスする形をとった。結果は中国5名、インド5名の採択となった。前年度とは異なり、受け入れに至る過程は大変スムーズで、到着時の出迎え体制まで順調に整えられた。チューターは、前年度の短期派遣留学生や北米教育研究センターの主催する海外研修に参加した学生から選考した。

2 実施状況

A 受け入れ・オリエンテーション

受け入れ対応は在鹿留学生と事務局が分担する態勢をとった。二か国からそれぞれ到着

時間等も異なり、多少の混乱は予測されたが、結果的には全員、問題なく宿舎に到着できた。オリエンテーションは初日に2時間実施された。関係者挨拶、担当教職員の紹介、チューター、留学生の自己紹介、プログラムの概要説明、奨学金給付、写真撮影ののち、大学・鹿児島市・鹿児島県の紹介を関係教職員が分担する形で行った。使用言語は英語のみで通訳等は介さなかった。

B 日本語演習

12日間を通じて日本語演習を15コマ開講し、テスト等を実施して達成状況に応じ、1単位付与することとした。単位換算については既存の履修規則に準拠するものとし、プログラム修了後の留学生センター運営委員会で単位認定を行い、単位認定証明書は本国に送付することとした。入門レベルの授業を1日1または2コマ、連続開講することについては、本プログラムへの応募者が必ずしも日本語学習を主目標とはしていないため、懸念もあったが、実際に開講してみると、それは杞憂であった。日本語担当のコーディネーターのもと、担当講師2名が入念に導入項目等について準備、打ち合わせを行い、またこのプログラム専用のテキストを編纂するなどの努力が功を奏し、受講者は全員、日本語学習に強い意欲を示し、連日、語彙を増やし、会話力を増していく状況が傍目にもよくわかるほどであった。プログラム前半に実施された工学部の研究室訪問時も、自己紹介の仕方や、名刺作成とその差し出し方など、万端整えている様子がうかがわれ、言語的にも文化的にも、前年度に増して、適応力の高い学習者であったといえよう。終了時には、日本語による短いプレゼンも全員が元気よく行い、無事修了証を受け取るとともに単位認定も行われた。

C 英語による講義

英語による講義は、異文化理解2コマ、日本語概論、鹿児島の自然環境をテーマとした。講義は50分としたため、時間的には不足がちであった。異文化理解は、日本で生活する上での「マナーと習慣」「鹿児島の歴史地理入門」をテーマとした。学習者は10名中3名が文系、残りは工学系の学習者であったが、全員がどの科目にも積極的に興味を示す傾向が強く観察され、大変意欲的で仲のよい学習者群であった。また今回は、ヨーロッパより異文化適応に関する専門家を招聘し、10人の留学生を対象とする「異文化適応ワークショップ」(2時間)を2日間開講した。グループワークやディスカッション、パントマイム、ロールプレイなど多彩なメニューで、文化とは何か、コミュニケーションとは何か、異文化を理解するためのスキルなどを学生たちはアクティブに学ぶ機会を得た。

D 日本人学生チューターによるひらがなセッション等

ひらがなについての教え方の講義を事前に行った上で、留学生とのマンツーマン学習を行った。回数は1回であったため、ひらがなの導入程度ではあったが、担当した日本人学生チューターは積極的に指導を行い、その後のフィールドトリップ等での相互交流が活発に行われる基礎となった。

E フィールドトリップ

予定していたフィールドトリップは、事前講義ののちの歴史博物館見学、そして始良バスツアーによる一日バス旅行で、工場見学、天体望遠鏡の視察、町歩き、古民家体験等を行った。いずれも日本人学生チューターも同行し、多人数による移動見学にも関わらず、集団での行動もとれ、また適宜補足説明がなされるなど、様々な角度から参加留学生は鹿兒島の地域に対する知見を深めることができた。

F その他の活動及び修了式

その他に学生食堂へのガイダンス、工学部研究室訪問ツアーなども工学部の全面的な協力により実施された。修了式では、留学生による日本語でのプレゼンテーション及びプログラムについての英語での感想発表、またスタディ・レポート等の提出など、各種の活動が組み込まれ、教職員、チューター等が同席する中、最後のとりまとめを行った。

3 結果と展望

A 受講者によるプログラム評価

プログラム修了時に、受講者によるプログラム評価を実施した。受け入れ体制から、プログラムの内容、その他、以下に掲げる項目について、4段階評価を行った。以下にその結果を掲載する。結果は（大変よい）と（よい）のみで、それ以下の評価はなかった。

(回答者数10名)

項目	Excellent 大変よい	Good よい	Fair まあまあ	Poor よくない
応募時情報提供は十分だったか?	8	2		
応募時手続きはスムーズだったか?	10			
到着時スタッフとのコミュニケーションは?	7	3		
空港等の出迎えはよかったか?	6	4		
奨学金支給はスムーズだったか?	9	1		
宿舎設備は満足できたか?	7	3		
宿舎の運営、支払い等はよかったか?	8	2		
スタッフからの生活情報提供は十分だったか?	7	3		
チューターからの情報提供は十分だったか?	7	3		
オリエンテーションは役に立ったか?	9	1		
日本語演習内容はよかったか?	10			

日本語演習方法はよかったか？	9	1		
日本語教員の資質は十分だったか？	10			
英語講義内容はよかったか？	6	4		
英語講義方法はよかったか？	6	4		
フィールドトリップの運営はよかったか？	8	2		
フィールドトリップの企画内容はよかったか？	9	1		

(その他の記述)

- ・ 日本の言語、文化、歴史、鹿児島についてよりよく知ることができた。
- ・ 日本語講師は全員すばらしかった。
- ・ 中国人は日本語をローマ字で学ぶよりも漢字で学んだほうがいい。
- ・ 始良バスツアーは、英語の情報がほしかった。
- ・ 2週間ずっと充実していた。また近い将来、鹿児島に戻ってきたい。
- ・ 人生で最良の2週間であった。日本と日本人に対する尊敬の念が増した。

B 学習者のスタディ・レポートに記載された特筆すべきコメント

<p>1 週目のカリキュラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業は午前中だけのほうがよい。午後は日本の生活を知る機会。 ・ 始良バスツアーと工学部研究室訪問がとくによかった。 ・ 日本語のレッスンはワンダフル。 ・ 語学学習のおもしろさはびっくりするほどだ。 ・ いろいろな国の人と友だちになれたことがうれしい。 ・ 鹿児島で生活し、勉強するのはとても快適で、便利だ。 ・ 教職員はとても仕事熱心。人々もみんな親切だ。チューターもよかった。 ・ 文化の授業で、日本についてより深く学ぶことができた。 ・ 維新ふるさと館を訪れることにより、日本の急速な近代化を知ることができた。 ・ 学生からひらがなを学んだのも貴重な体験で、この1週間はおどろくことばかりだ。 ・ 私はベジタリアンなので、食べ物には少し苦労した。 ・ 日本語の講師はすばらしく、どうしてインドにはこういう教員がいないのかと思った。 ・ 歴史の授業が興味深かった。私は歴史が好き。 ・ フィールドトリップは、学生の中に連帯感を生んだ。
<p>2 週目のカリキュラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 異文化適応ワークショップはよかったけれど、英語が難しかった。 ・ たった2週間の勉強で、日本語でのプレゼンができるなんて信じられない気持ち。

- ・ 異文化適応ワークショップはとても創造的な体験だった。他の文化を尊重することを学んだ。
- ・ 教師も学生もみんなが誠実で、フレンドリーだった。
- ・ 自然についての講義は少し前門的だったが、工学が専門なので興味深かった。
- ・ 異文化適応ワークショップは理論的だったが、講師は多少偏見を持っているように思った。
- ・ 異文化適応ワークショップはこの週のベストだった。
- ・ 日本語についての講義は言語に対する認識を深めるのに役立った。
- ・ 2週間で自分の経験を日本語で話せるようになるなんて、すばらしい経験だった。
- ・ 異文化適応ワークショップの講師は西欧中心の考え方をしていると思った。
- ・ 日本語の学習を続けたい。

Closing Remarks (まとめ)

① このプログラムへの参加動機

- ・ 本当の日本を知りたかった。
- ・ 国際関係が専門なので、このプログラムにはとても興味があった。
- ・ すでに少し知識は持っていたけれど、ぜひ本当に知りたかった。
- ・ 直接的な経験がほしかった。
- ・ インド以外の国での勉強について展望を持ちたかった。

② 学習成果

- ・ 新旧の文化が調和を保って存在する多様性を学んだ。
- ・ 他の文化圏の人々とコミュニケーションをとるおもしろさを知った。
- ・ 責任感を持つようになり、自立心も学んだ。
- ・ 期待していた以上のものを学ぶことができた。
- ・ この土地に滞在することで、自分は以前よりよい人間になった。
- ・ 丁寧さというものを学んだ。

③ 来日前と来日後の認識の変化

- ・ 飛行機の乗る前と乗った後では、日本に対する認識ががらっと変わった。日本は想像以上に清潔で、人々が親切、平和だと感じた。
- ・ 日本はテクノロジー大国と思っていたけれど、伝統もとても重んじる国だと知った。
- ・ 日本人は正直で親切で、規律正しいという思いは以前以上に強化された。
- ・ 日本について、帰国したら人々に伝えたい。
- ・ 来る前は日本についてあまり知らなかったけれど、来てみると、テクノロジー、丁寧さ、一生懸命働く日本人が私を魅了した。

④ 日本での経験と将来への展望

- ・ 常に忍耐強く。再留学のためにがんばる。

- ・ 次に留学するとしたら、やっぱり日本を選びたい。
- ・ 人生の中でとても貴重な体験をした。また来たい。
- ・ ここに滞在することで私は言葉で表現できないぐらい変わった。積極的になること、友達を作ること、オープンで自然な態度などたくさん学んだ。
- ・ 日本に再留学することを本気で考えるようになった。
- ・ 博士課程を日本ですることを考えるようになった。
- ・ 修士課程のためにこの土地に戻ってきたい。教員たちはみな深い知識を持っている。今や私は日本のテクノロジーと文化の大ファンだ。
- ・ 帰国したら奨学金について教えてもらい、再留学したい。

C 目標達成及びプログラムの今後の展望

以下のような目標を設定し、大方達成できたと考える。しかしながら、継続的な学習意欲の維持については今後の動静を見る必要がある。日本語学習の基礎や日本人の考え方、行動様式、地方都市鹿児島の魅力幅広く知ったことは、彼らのその後の学習や人生設計、価値観の構築に大いに役に立つと思われる。

- ① 日本語学習の基礎を知る。
- ② 日本文化、鹿児島の自然について知見を深める。
- ③ 日本人との交流を深化させる。
- ④ 日本人の生活態度、価値観を知る。

協定校の担当者からはすでに次年度以降への期待、問い合わせが寄せられたが、本プログラムそのものは今年度限りとなる。次年度以降はまた別のプログラムへの応募を期待したい。最後に、スタディ・カゴシマ・ショートステイ・プログラムの実施体制の要となった教職員、日本人学生チューター等による本プログラムの維持展開への尽力を高く評価するとともに、本プログラムの実施を採択してくださった日本学生支援機構にも謝意を申し上げたい。

大嶋 眞紀（文責）
（鹿児島大学留学生センター長）